

『采覧異言』にみる「元明史書」の実態^①

——元代以前の史書を中心に——

徐 克 偉

キーワード：新井白石、蘭学、『采覧異言』、漢籍、元明史書

はじめに

新井白石（1657-1725）は、江戸時代中期の著名な朱子学者であり、後期の蘭学者によって蘭学の草創者と位置付けられた。^②なぜなら、白石が日本で最初の体系的な世界地理学書『采覧異言』（1713年序）を著し、先駆的な実績を残していたからである。^③『采覧異言』及び白石の世界地理学研究の成果について、学界では早くから多くの研究がなされ、豊かな成果が挙げられている。殊に、鮎沢氏と宮崎氏の両者の専著によって、白石の蘭学の経路が明らかにされた。つまり、白石は、イタリア人宣教師への尋問をきっかけとし、さらに江戸参府のオランダ人とその話を検証した。また、マテオ・リッチ（Matteo Ricci、1552-1610、漢名＝利瑪竇）の漢文世界地図、オランダ製世界地図などの文献も利用している。注意すべき点として、両氏が言及する参考にした漢籍についてである。具体的に言えば、卷三のアジア各国及び地方で、白石は十数種の漢籍を参考しているという点である。^④

朱子学者かつ『読史余論』（1712）、『古史通』（1716）などの史論の作者としての白石が、著述において漢籍を参考することは驚くに値しない。そして『采覧異言』の「凡例」にも、明確に「凡亜細亞諸国、雜見元明史書者、略取其説、以備参考」と論じている。^⑤ただし、いわゆる「元明史書」に対して、宮崎氏の書目リストがあるが、単に白石の言った著作名或いは作者名を羅列するのみで、具体的な検証もなく、また「続四裔考、明の章潢の記録さらに王元翰・李衷一の著書（書目不詳）」という疑問も残されている。^⑥その後、李氏が白石の漢学知識とその経路について考察したが、具体的な典籍や知識に触れたことがないという。^⑦いわゆる「元明史書」とは、どのような著作及び関連知識を含んでいるか、未だ分からない。

したがって、本稿では、『采覧異言』にみる「元明史書」及び関連知識を系統的に整理し、その役割と問題を論じてみよう。

一、「元明史書」の射程とその中身

白石の言説及び先行研究のおかげで、いわゆる「元明史書」は凡そ十数種の漢籍だと推定できる。しかし白石の学術背景は今日と大きく異なり、参考や引用などの方法が目下の学術規範と不一致な部分が多く、白石自身の記述だけでは、一体、どのような作品を参考にし、いかなる知識を利用したのかを厳密に把握することはできなからう。だからこそ、白石が言及した著作及びその知識を一々検証する必要があると考える。論述の便宜のために、下記の一覧表を作成した。

『采覧異言』にみる「元明史書」の一覧表⁸⁾

番号	巻次	事項	白石の述べた 作品名・作者名・知識	出典
01	一	モスコビヤ [Moscovia] 没厘箇未突	唐書所載黠戛斯	1 新唐書・列伝・回鶻下
02	一	ポルトガル [Portugal] 波爾杜瓦爾	明茅元儀曰…伝鳥銃於豊州。	2 武備志・占度載・四夷・日本考・利器
03	一	ガアリ [Gallia] 拂郎察	明正徳丁丑。佛郎機…事見顧応祥所説。	3 籌海図編・経略・兵器・佛郎機式
04	一	フランド [Holland] 喝蘭地	明人呼為紅夷…此王元翰所記也。 万曆甲辰七月。 紅毛艘渡閩求市…此李衷一所記也。	4 三才図会・人物・紅夷国 *5 季光縉『却西番記』(孫引き、6 物理小識・器用類・洋舫)
05	一	グルウンヨンデヤ [Groenlandia] 臥兒狼徳	物理小識云把勒亜是已	6 物理小識・鳥獸類下・海族把勒亜

番号	巻次	事項	白石の述べた 作品名・作者名・知識	出典
06	二	トルカ [Truca] 都兒	土魯…説見続文獻通考注 元史。西北地名・途魯吉…	7 続文獻通考・四裔考・西夷・土蕃即西番 8 元史・志・地理・西北地附録 2 武備志・占度載・四夷・土魯番考、哈密考
07	三	アラビヤ [Arabia] 亜蠟皮亜 附	元人陶九成説。天方国所出木乃伊… 揚升庵引杜環經行記。以天方国為古大食国… 続文獻通考云。天方在海西之尽… 元劉郁西使記云。報達之西… 默德那。考之明世諸書… 按会典。天方貢物。又有各色氍毹… 別語拔爾。元史作別庵伯爾。	9 南村輟耕録・木乃伊 *10 經行記→11 鉛丹總録・天方国(孫引き) 7 続文獻通考・四裔考・西夷・天方 12 西使記・天房 7 続文獻通考・四裔考・西夷・默德那 13 大明会典・礼部・朝貢・西戎 8 元史・列伝・賽典赤瞻思丁
08	三	オルムス [Ormus] 恩魯謨斯	明永楽宣徳間鄭大監鄭和等。再奉使西洋。其至此。	7 続文獻通考・四裔考・西南夷・西南夷別録
09	三	ハルシヤ [Persia] 巴爾齋亜	明正徳入貢巴喇西国…(続文獻通考) 鄭和西使道里図	7 続文獻通考・四裔考・西南夷・巴喇西 2 武備志・占度載・航海
10	三	モゴル [Mogol] 莫臥兒	元人所謂象鼻。猫睛… 抛元史。回々本唐之回鶻国… 回々在西域…此明章潢所記也。	9 南村輟耕録・嘲回回 8 元史・本紀・太祖 14 図書編・古北方・回回館
11	三	マラバア [Malabar] 麻辣襍爾	元史云。南海諸番。惟馬八兒與俱蘭。足以綱領諸国… 続文獻通考云。馬八兒諸国。其沿革…	8 元史・列伝・外夷・馬八兒等国 7 続文獻通考・四裔考・西南夷・馬八兒等国

番号	巻次	事項	白石の述べた 作品名・作者名・知識	出典
12	三	ゴア[Goa] 臥巫	鄭和諸番道里図 瀛涯勝覽云。距中国。十万里余。	2 武備志・占度載・航海 15 瀛涯勝覽・西洋古里国、柯枝国
13	三	セイラン [Zeylan] 齋狼島	唐扶南伝。国王姓古龍。盤々伝。国人有崑崙勃姓… 鄭和諸番道里図 続文献通考云。仏寺内。有釈迦仏。 混身側臥… 永樂巳丑。遣中官鄭和…亦鄭和所取。	1 新唐書・列伝・南蛮・扶南伝、盤盤伝 2 武備志・占度載・航海 7 続文献通考・四裔考・西南夷・錫蘭山、西南夷別録・錫蘭并裸形国 15 瀛涯勝覽・錫蘭 裸形国
14	三	コチン [Cochin] 各正 附	瀛涯勝覽云。夏連雨成河… 小葛蘭…鄭和亦至其国…	15 瀛涯勝覽・柯枝国 15 瀛涯勝覽・小葛蘭
15	三	ナガバタン [Nagapattinam] 沙里八丹 マジリバタン [Masulipat-nam] 加寧八丹	鄭和諸番道里図	2 武備志・占度載・航海
16	三	ベンガラ [Bengala] 榜葛刺	按。榜葛刺。地広人稠…	7 続文献通考・四裔考・西夷・榜葛刺
17	三	ペグウ [Pegu] 琵牛	…仏書所謂舍衛乞食即此地也。目連所居。遺址尚存。	7 続文献通考・四裔考・西南夷・寶童龍国

番号	巻次	事項	白石の述べた 作品名・作者名・知識	出典
18	三	スイヤム [Siam] 暹羅	馬氏勝覽、瀛涯勝覽 図書編云。東南平行 続文献通考… 赤土国。始見隋書… 唐書所載。暹国…	15 瀛涯勝覽・暹羅国 14 図書編・西南夷・暹羅館 7 続文献通考・四裔考・西南夷・暹羅 16 隋書・南蛮・赤土 17 旧唐書・南蛮・西南蛮・暹国
19	三	マロカ[Malacca] 満刺加	鄭太監出使外番道里図 鄭太監海外道里図	2 武備志・占度載・航海
20	三	Sumatra [スマアタラ] 沙馬大刺	苻堅有言。云海東之事… 元史云。那旺… 鄭和諸番道里図	18 秦書→11 丹鉛総録・天方国 8 元史・列伝・外夷・馬八兒等国 2 武備志・占度載・航海
21	三	ボルネヨ [Bruneol] 波耳匿何	考。淳泥。本閩婆羅属国…	7 続文献通考・四裔考・西南夷・淳泥
22	三	ヤワ [Jawa] 爪哇	按。古閩婆羅国…	7 続文献通考・四裔考・西南夷・爪哇
23	三	マカオ [Macao] 阿馬港	西洋商舶所泊之私澳	7 続文献通考・市糴考

上表からみれば、白石の「アジア諸国」には、アラビヤなどのアジアにある 17 の国や地方だけではなく、モスクワ大公国（モスコビヤ）、ポルトガル、フランス（ガアリヤ）、オランダ（フランド）、グリーンランド（グルウンランデヤ）などのヨーロッパにある 5 つの国や地方と、アフリカに置かれた「トルコ」⁹⁾があると明確に分かる。つまり、「元明史書」の知識範囲はアジア、ヨーロッパ、アフリカの三大州——仮にトルコをアジア或いはヨーロッパに置くのであれば、亜欧二大州——にある 23 におよぶ国や地方に達することが分かる。

白石の「考」「按」にみる「元明史書」に至っては、『南村輟耕録』（1366）、『武備志』（1621）など元・明代の作品のほか、『隋書』（656）、『旧唐書』（945）、『新唐書』（1060）などの

唐・五代十国・宋代に成立した史書も確認できる。

具体的に言えば、主として元・明二代の史書には、2『武備志』、3『籌海図編』、4『三才図会』、5『却西番記』、6『物理小識』、7『続文献通考』、8『元史』、9『南村輟耕録』、11『鉛丹総録』、12『西使記』、13『大明会典』、14『図書編』、15『瀛涯勝覧』といった十三種類の作品があり、元代以前の史書は、1『新唐書』、10『経行記』、16『隋書』、17『旧唐書』、18『秦書』など五作品の記述がある。

紙幅に限りがあるため、今回は元代以前の漢籍だけを取り扱い、白石の参考とその経路を検討する。ただし、具体的な論証をはじめの前に、注意したいのは、宮崎氏が指摘する『続四裔考』は『続文献通考』の「四裔考」とするべきで、「明の章潢の記録さらに王元翰・李衷一の著書」はそれぞれ章潢の『図書編』、王圻（字は元翰）・王思義の『三才図会』、李光縉（号は衷一）の『却西番記』を指している。そのうち、白石に援引された「紅毛艘渡閩求市」という李衷一の記述の一節は『物理小識』（「器用類・洋舫」、そして「グルウンランデヤ」という部分では白石がその「鳥獸類下・海族把勒亜」を言及した）の引用文と完全に一致し、孫引きだと言えよう。

二、元代以前の史書の参考とその経路

元代以前の典籍を参考にした事の確認は比較的簡単であり、『秦書』『隋書』『唐書』『経行記』の四つのみに言及している。そのうち、『唐書』（『新唐書』と『旧唐書』の二種）と『隋書』はいずれも直接引用し、それ以外は明の楊慎『鉛丹総録』からの転載である。

巻一の「モスコビヤ」は、まずモスクワ大公国の地理的位置、気候、風俗などを簡単に述べ、続けて記述に基づき西洋人が見た冬の景色の中の人物の様子、着衣、氷上での運動について描く。また、オランダ人から得たモスクワ人の知識によって、末尾において白石は「其説与『唐書』所載黠戛斯同（其の説、『唐書』に載る所の黠戛斯と同なり）」¹⁰と指摘する。「唐書」には『旧唐書』（945）と『新唐書』（1060）の二種類があるが、どちらも黠戛斯（Kyrgyz、ハカス）に関する記述があり、『新唐書』（巻217 下列伝142下）「回鶻下」にはハカス人の容貌についての情報もある。また白石はモスクワの気候、人々の容貌、スケート、物産など様々な事を記録する。「地夏沮洳、冬積雪。人皆長大、赤髮、皙面、緑瞳…氣多寒、雖大河亦半氷。以板藉足、屈木支腋、乃馳氷上、一蹴百歩。稼有禾、粟、大小麥…」¹¹つまり白石のモスクワに関する記述は、西洋の図画やオランダ人の説明を基にしているが、部分的内容については『新唐書』の黠戛スに関する記述を用いる。これについて白石は「兩地相距不甚

相遠、即是西北地方俗耳。」¹²⁹と述べる。

卷三「セイラン」は、今のスリランカに関する記述である。冒頭で白石がオランダ人から肌の色が黒いという事を聞き、コロンボとしたのではないかと推測している。

其人黒色、古之所謂崑崙奴是耶？（其地和蘭呼為「コロンボ[Colombo]」、云此人黒色故、西人凡呼黒人為「コロンボ」。按、唐『扶南伝』『盤盤伝』『國王姓古龍』、『盤盤伝』『國人有崑崙勃姓、亦云古龍。曰古龍者、崑崙声近耳。』コロンボ、崑崙勃、声亦相近、蓋本因地為姓也）。¹³⁰

この引用によると白石は、西洋人が黒人を「Colombo」、つまり地名に基づき呼んでいるとする。また唐代の『扶南伝』『盤盤伝』、即ち『新唐書』（巻222 下列伝147下）「南蛮下」に扶南、盤盤に関する内容が見られる。『新唐書』『扶南伝』に「王姓古龍…其人黒身…」¹³⁰とあり、「盤盤伝」には「其臣曰勃郎索濫、曰崑崙帝也、曰崑崙勃和、曰崑崙勃諦索甘、亦曰古龍。古龍者、崑崙声近耳。」¹³⁰とある。白石が両者の「古龍」および皮膚が黒いことの間連を用いて、さらに「古龍」と「崑崙」の発音が近いことに基づく。さらに進めて「崑崙勃」と「Colombo」の発音も似ていることから、この人々が崑崙奴であると推測したのであろう。

卷三に記載される「アラビヤ」は、アラブに関する記述と考察である。白石はこの地域の人々が人肉で薬を作ることを知っており、オランダ人にも確認した。ゆえに『輟耕録』から「天方国所出木乃伊」と引用し、双行注に「揚昇庵引杜環『経行記』、以天方為古大食国、疑非」と付す。杜環の生没年は不明であり、『経行記』も散佚しているが、その内容の一部は杜佑『通典』（801）などに見られる。

白石の記述を見ると、参考にしていたものは明の楊慎（1448・1559、号は昇庵）の著作、つまり『丹鉛総録』（巻二地理類）であることが分かる。「天方国」に関する考察で「杜環『経行記』云「大食国、其侍女魁偉壮大…四方輻湊、万貨豊饒。」「大約与永樂中三宝太監鄭和下西洋所説天方国同、豈即大食国耶。苻堅時、新羅王派遣使衛頭朝貢、堅曰「卿言海東之事、与古代不同、何也。」「¹³⁰と述べる。「大食」とはパルス語のタジク（Tazi 或いは Taziks）の音訳であり、もともとはイラン部族の名称であった。唐宋典籍では、多くがアラブ帝国を示す言葉として用いる。「天方」は、もとはイスラム教の聖地メッカ（Makka）を指すが、後にアラブを意味するようになる。故に楊慎は、天方は古の大食の地と推測するが、これに対して白石は懐疑的態度をとった。

楊慎が論じる後半部分の苻堅の話は巻三「スマアタラ」にも見られる。当該部分は蘇門答臘に対する白石の記述である。白石は考察において「美（白石の諱は君美）曰。苻堅言云『海東之事。与古代不同。』吾于海南之事。亦言之也…」¹⁹⁾と述べる。これは明らかに古典を引用することで、西洋人が論じる内容と漢籍の記載が異なる理由を解説している。前秦の皇帝、苻堅（338-385）の疑問は、なぜ新羅使者の答えとかつての記述と異なるのか。その内容は、もとは『秦書』に記載されていたが、同書が未完成あるいは禁書扱いとなり、後世に伝わっていないためである。では『丹鉛総録』「天方国」において、楊氏は苻堅の話を用いし、何故に外国事情が歴史書に記載された内容と違ったのか、説明している。¹⁸⁾白石が『通典』など他の古い文献に記載される一段に依拠している可能性があるにせよ、楊慎の『丹鉛総録』を読んでいた事もまた事実なのである。

巻三「スイヤム」では、白石は西洋人の言説、日本の資料、マテオ・リッチの地図、中国の史書を全面的に用い、同地の自然や人文地理、歴史などを記述する。その中でリッチの言う「暹羅、古赤土国、一名波羅利」に対して、白石は次のように考察する。

美按、赤土国、始見『隋書』、以為扶南之別種、頗為相近。然其說曰「国在大海中、東羅刺国、西婆羅娑国、南訶羅旦国、北距大海、地方数千里。」即今地理、与此大異。『唐書』所載「驃国、東隣真腊国、西接天竺国、南尽溟海、北通南韶些樂城界。其都城、相伝本是舍利仏城。」頗与此合。¹⁹⁾

赤土国に関する情報は、『隋書』（巻 82 列伝 47）「南蛮・赤土」が最初の記載であり、当時の西方人が言う種族に近いが、地理的位置は大きく異なる。さらに『旧唐書』（巻 197 列伝 147）「南蛮 西南蛮・驃国」に記載される西方人の言説と非常に近い。ここに記述される舍利仏城について、白石はさらに引用する。

（『統文献通考』云「其羅城、構以磚、周一百六十里、濠岸亦構以磚、相伝本是舍利仏城。内有居人数万家、仏寺百余区。其堂宇皆錯以金銀、幄以丹彩。地以紫氈、覆以錦罽。其土宜菽粟稻粱、無麻麦。）且今都下、有一大伽藍、豈是所謂舍利仏城者也耶。」²⁰⁾

事実、この一段と前述の『旧唐書』「南蛮西南蛮・驃国」の引用部分以後の記述は基本的に

一致しており、主に羅城の仏教伝統と雰囲気に関する記述である。しかしこの部分は『続文献通考』には確認できず、恐らく元代の『文献通考』（巻 330「四裔考・驃国」）の誤りかもしれない。

終わりに

以上、元代以前の典籍について、新井白石がモスクワ大公国、スリランカに関して『新唐書』の西北（回鶻）、西南蛮、南蛮などの三カ所の記述を、またシャムでは『隋書』と『旧唐書』の「南蛮」、「南蛮 西南蛮」の二カ所の記載を直接参照していることを確認した。これら書籍を参照することで白石は、新たに得た知識と漢籍に記載される蛮夷情報を結び付けた。また、明代の学者、楊慎『丹鉛総録』では、アラビアとスマトラに関する考察部分に『経行記』と『秦書』（苻堅の言葉）を引用しているが、楊慎が天方、つまり大食に対して正確な判断を有していたかは疑問が残り、苻堅の言葉を引用しているが、典故を使い、類比するのみである。

注

- 1) 本稿は中国国家社会科学基金 2023 年度一般項目「日本江戸儒学者新井白石蘭学文献的整理与研究」（批准番号 23BSS041）の助成による研究成果の一部である。また、原稿は北陸大学の教員二ノ宮聡氏によって、校訂・翻訳（後半）され、深く感謝したい。
- 2) 大槻玄沢「六物新志巻首題言七則」、大槻玄沢訳考、杉田勤校訂『六物新志』、兼葭堂、1786 年（序）、葉 2 表。
- 3) 佐藤昌介「新井白石の世界地理学研究」、杉本勲編『体系日本史叢書 19：科学史』、山川出版社、1982 年、293-295 頁。
- 4) 鮎沢信太郎『新井白石の世界地理研究』、京成社、1943 年、2-26 頁。宮崎道生『新井白石の洋学と海外知識』、吉川弘文館、1973 年など。
- 5) 新井白石「凡例」、新井白石著、大槻文彦校『采覧異言』（上）、白石社、1881 年、葉 1 裏。
- 6) 宮崎道生『新井白石の研究』、吉川弘文館、1984 年、267 頁。
- 7) 李梁「新井白石の知識世界序説」、『人文社会論叢』（人文科学編）第 33 号、2015 年、28-31 頁。
- 8) 本表は『采覧異言』において白石が述べた関連記述に基づき作成した。まず、「事項」と

いう欄では、割注にみるカタカナ・漢字表記はすべて略され、[] 中のアルファベット語はカタカナ語より転写されている。「白石の述べた作品名・人名・知識」という項目部分では、できるだけ原文を引用している。最後に「出典」の項目を設け、引用文を検証し、関連文献・章節を示している。

9) 白石はトルコをアフリカに位置づけている。それは、オスマントルコ帝国の領土がアジア、ヨーロッパ、アフリカに跨がり、さらに西洋の人々から得たトルコが欧亜各地への拡張という情報から判断したのかもしれない。

10) 新井白石著、大槻文彦校『采覧異言』(巻一)、葉 5 裏。

11) 同上書、葉 5 表。欧陽修、宋祁撰『新唐書』(第 19 冊)、中華書局、1975 年、6147、6148 頁。この一文は元代の馬端臨『文献通考』(巻 348「四裔考」25)にも見られる。白石は主に『続文献通考』を参照していたようだが、この部分に関しては何を参照したか言及がない。

12) 新井白石著、大槻文彦校『采覧異言』(巻一)、葉 5 裏。

13) 同上書、巻三、葉 9 表。

14) 欧陽修、宋祁撰『新唐書』(第 20 冊)、中華書局、1975 年、6301 頁。

15) 同上書、6300 頁。

16) 楊慎撰、王大亨籤証『丹鉛総録箋証』(上)、浙江古籍出版社、2013 年、93 頁。

17) 新井白石著、大槻文彦校『采覧異言』(巻三)、葉 17 表裏。

18) 楊慎撰、王大亨籤証『丹鉛総録箋証』(上)、93 頁。

19) 新井白石著、大槻文彦校『采覧異言』(巻三)、葉 14 表裏。

20) 同上。